

北条泰時・時頼邸跡

雪ノ下一丁目 371 番-1 地点発掘調査報告書

1985年8月

北条泰時・時頼邸跡発掘調査団編
鎌倉市教育委員会発行

北条泰時・時頼邸跡

雪ノ下一丁目 371 番-1 地点発掘調査報告書

1985年8月

北条泰時・時頼邸跡発掘調査団編
鎌倉市教育委員会発行

序

本書は鎌倉市の若宮大路沿いの雪ノ下一丁目373番の1に所在する遺構の発掘調査に関する報告書である。

この附近は、「北条泰時・時頼邸」の一部といわれ、鎌倉ではもっとも重要な内域の一部であるといえる。しかし現在では、人家が密集しており、なかなか発掘調査などは出来る状態ではなかった。たまたまこの地区で住宅改築が行われることになり、1984年2月から3月にかけて、僅かな面積ではあるが調査することが出来たのである。

これにより「北条泰時・時頼邸」が解明されたというのには程遠いものであるが、本文にもある様な木簡が二点出土することは、極めて重要な意義があると考えている。これらの木簡は、今まで見られなかった様な特徴を持ち、そこに書かれている人名などは、かなり狭い範囲で、文献上にあられる人物に同定出来ると思われ、内容についても御家人が公共事業などのために負う負担などを含んでいるのではないかということで、中世史研究者の注目を集めることになったものである。

鎌倉の市街地は、どこをとっても、皆遺跡・遺構があり、今回の調査はどんな狭いところでも何が出てくるか解らないことを如実に示したものといえよう。言わずもがなの事であると思うが、今後はこの地区では、水道管一本の埋設工事にも注意の目を向けなくてはならないと思われるのである。

今回の調査でお世話になった神奈川県教育庁文化財保護課・鎌倉市教育委員会文化財保護課の関係の方々にお礼申し上げますと共に、将来の御協力をお願いしたい。

北条泰時・時頼邸跡発掘調査団団長

吉田章一郎
青山学院大学教授

例 言

1. 本書は鎌倉市雪ノ下一丁目371番1に店舗併用住宅が建設されるに先立って実施された発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は鎌倉市および神奈川県より委託され、1984年2月から同年3月にかけて、青山学院大学教授吉田章一郎を団長とする発掘調査団が実施した。
3. 調査団の編成は以下のとおりである。

団 長	吉田章一郎
調 査 主 任	馬淵和雄
調 査 員	福田誠・浜口康
調査補助員	森孝子・瀬田哲夫
調査協力者	武淳一・安田ヒデア・成田サキ
調査協力機関	第一住建株式会社

4. 本書の執筆には馬淵が、図版作製には馬淵・福田・浜口があたり、団長の指導のもとに馬淵がこれを編集した。
5. 本書に使用した写真は、遺構・遺物とも馬淵が撮影した。
6. 本書の内容の一部は先に馬淵が発表した「中世鎌倉若宮大路側溝出土の木簡」(『日本歴史』第439号1984年12月)と重複している。
7. 第15図は1984年に調査した雪ノ下一丁目372番7池点の報告書掲載図をもとに作成した。(「北条奈時・時頼邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』昭和60年3月鎌倉市教育委員会)
8. 本書の作製にあたっては次の方々から御教示・助言を賜った。(順不同・敬称略)
手塚直樹・河野眞知郎・斎木秀雄・宮田真・原広志・松尾宣方・玉林美男・永井正憲・服部実喜・伊藤正義・大橋康二・田代郁夫
木簡の読み方や御家人については次の方々から格別の御教示を賜った。(同上)
石井進・貫達人・大三輪龍彦・網野善彦・三浦勝男。
以上の方々には、記して深く感謝の意を表する次第である。

目 次

本文目次

序	(I)
例 言	(II)
第1章 調査地点の位置と歴史的環境	(1)
第2章 調査の経過と概要	(3)
第3章 調査結果	(5)
第1節 検出遺構	(5)
1. 近代遺構	(5)
2. 第 I 面	(6)
3. 第 II 面	(7)
第2節 出土遺物	(11)
1. 舶載陶磁器	(11)
2. 国産陶磁器・土器質雑器	(14)
3. かわらけ	(16)
4. 石製品	(17)
5. 木製品	(18)
第4章 木簡について	(21)
第5章 調査のまとめ	(24)

挿 図 目 次

第1図 調査地点位置図 …………… (2)	第9図 かわらけ(1) …………… (15)
第2図 調査区設定図 …………… (3)	第10図 かわらけ(2) …………… (16)
第3図 近代の木組排水施設と木桶 …… (5)	第11図 砥石・碁石 …………… (17)
第4図 第Ⅰ面遺構全図 …………… (折り込み)	第12図 五輪塔(火・木輪) …………… (18)
第5図 第Ⅱ面遺構全図 …………… (折り込み)	第13図 木製品 …………… (19)
第6図 柱穴列 …………… (8)	第14図 南北溝Ⅱの杭(部分) …………… (20)
第7図 船載陶磁器 …………… (12)	第15図 溝対比図 …………… (24)
第8図 国産陶磁器・手焙り …………… (14)	

図 版 目 次

図版1-1 遺跡遠景	図版7-2 南北溝Ⅱ土層断面(南から)
2 同 近景	3 南北溝Ⅰ土層断面(南から)
図版2-1 近代の木組排水施設と木桶 (東から)	図版8-1 船載陶磁器(内面)
2 同 上(西から)	2 同 上(外面)
図版3-1 第Ⅰ面全景(南から)	図版9-1 国産陶磁器
2 第Ⅰ面下南北溝Ⅱ上層の状態 (南から)	2 同 上(渥美・常滑)
図版4-1 第Ⅱ面全景(南から)	3 白かわらけ
2 同 上(西から)	4 手焙り
図版5-1 南北溝Ⅱ(南から)	図版10 かわらけ
2 同 上(北から)	図版11 木簡
3 同上完掘後の状態(南から)	図版12-1 木製品
図版6-1 東西溝(東から)	2 石製品
2 南北溝(北から)	図版13-1 南北溝Ⅱ杭1
3 木簡(第13図6)出土状況	2 同 上 杭2
図版7-1 南北溝Ⅰ・Ⅱ北壁土層断面	3 同 上 杭1(部分)
	4 同 上 杭2(部分)

第1章 調査地点の位置と歴史的環境

「鎌倉城」と呼ばれる馬蹄形の山塊に圍繞された鎌倉旧市街は、鶴岡八幡宮から市街中心を海岸に向って縦貫する若宮大路と、これにほぼ平行・直交する幾つかの通りによって区画されている。このうち、鶴岡八幡宮前（南面）を東西に走る通りを「横大路」といい、若宮大路の東側約200mを南北に走る通りを「小町大路」という。横大路の約200m南には、若宮大路から小町大路に到る真っ直ぐな路地があり、この路地と、横大路東半分・若宮大路・小町大路に四辺を囲まれた、一辺およそ200mに及ぶ方形の地域が「北条泰時・時頼邸」として神奈川県遺跡台帳（台帳番号282）に記載されている場所である。調査地点はこの宏大な地域の西辺中央やや南寄りの一角にあたり、鶴岡八幡宮から約130m程南の、現在の若宮大路東側歩道に臨む位置にある。地番は鎌倉市雪ノ下一丁目371番-1。

『吾妻鏡』によれば、御所（幕府）は当初大倉にあったが、建保五年（1217）に焼失したため、嘉祿元年（1225）宇津宮辻子に移転（「宇津宮辻子幕府」）、さらに建長四年（1252）6月「若宮大路の東の畑」に新たに造営された（「若宮大路幕府」という。宇津宮辻子幕府は、「泰時・時頼邸」に比定されている場所の南辺の路地より以南61丈^①（約184m）が充てられている。宇津宮辻子は今日までその名を留めている（第1図）が、これが往時のものと同一の場所にあるという確証はなく、また「泰時・時頼邸」南辺路地から今日の宇津宮辻子までの距離は165mと、20m強の隔たりがみられる。若宮大路幕府の場所もいまだ確定的でなく、二説あって、宇津宮辻子幕府と同一郭内にあるとするものと、北側に移動したとするものとに分かれる。宇津宮辻子幕府の北側にはかねて泰時の正亭があるので、幕府の北方への移動には当然、泰時邸の変更が伴ったはずであるが、『吾妻鏡』にはこの点の記述はない。

調査地点はこういった場所の一角にある。この付近を発掘調査するのは本調査が最初であったが調査後の資料整理中に、本地点より約15m程北側の、やはり若宮大路沿いの一角が発掘調査されており、ここでも本地点で検出した溝の続きと思われる遺構が確認されている^②。

北条泰時（1177-1242）は鎌倉幕府三代目執権で、初代執権北条時政の嫡孫である。父の二代目執権義時が元仁元年（1224）に死んだ跡を継いだ。貞永元年（1232）に式目51ヶ条（「御成敗式目」または「貞永式目」）を制定している。

北条時頼（1226-1263）は五代目執権である。泰時嫡孫の四代目執権経時の弟。経時が病気になる寛元四年（1246）に執権に就き、同時に北条家得宗となる。康元元年（1256）に出家、執権を長時に譲る。北条氏の権勢は時頼の頃、最も盛んであったといわれる。仏教の篤信者で、建長五年（1253）、宋から蘭溪道隆を招いて建長寺を建てている。

- 註 (1) 『吾妻鏡』 嘉禄二年三月二十日条
 (2) 『吾妻鏡』 嘉禄元年十月二十日条に、丈尺を正して「東西二百五十六丈五尺」「南北六十一丈」とした、とあるが東西の数字は鎌倉市街地の広さからみてどう考えても大き過ぎ、高橋光壽氏は「鎌倉市史」総説編で後代の筆写の際の勘違いであろうと書いている。
 (3) 『北条泰時・時頼隠跡』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』 昭和60年3月鎌倉市教育委員会



第1図 調査地点位置図

第2章 調査の経過と概要

発掘調査は1984年2月1日から開始し、例年にない頻繁な降雪に悩まされながら、3月11日に終了した。

前年に鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果から、地表下約50-70cmまで近・現代の客土が入っていることが判明していたため、この部分に重機を導入して掘削を始めた。調査面積は約80 m^2 である。調査にあたっては、若宮大路にはほぼ平行する軸線と、これに直交する軸線を5mおきに配し、便宜上前者を南北軸、後者を東西軸と呼び、西から東に向けてアルファベットを、北から南に向けてアラビア数字を付した。各々の方眼区画の呼称にはその北西角の軸線交点を充てた。南北軸の方位は $N-34^{\circ}20'-E$ である

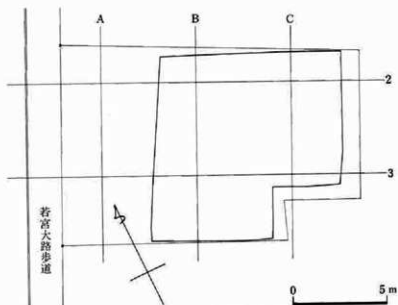
調査経過については以下に日誌の抜粋を記す。

2月1日 晴れ 前日の雪全面に残り調査区に入らず。

2月2日 晴れ 仮設事務所を設営、調査器材を搬入。残雪を除去し、発掘区域に地縄を張る。

2月3日 晴れ時々曇り 東壁際から重機による近・現代客土の掘削を開始。これを追う形で、人力によって包含層を掘削し始める。地表下約70cmで堅い土丹版築面を検出、これを第1面とする。

2月4日 晴れ時々曇り 重機による掘削続く。遺構検出作業に入る。今一つ土層堆積が不明瞭



第2図 調査区設定図

なため中央部南端を深掘りするが、地表下2m近くに及んでも地山層に達し得ず。調査区北壁際に近代のものと思われる木組排水施設を検出。

2月6日 晴れ一時曇り 重機及び人力の粗掘り終了。西側に土丹版築面無く、この部分は溝であると判断する。版築面上の遺構検出作業終了。

2月9日 晴れ 遺方杭設置。溝上層を掘ると共に3軸沿いを深掘り。版築面上の遺構掘り上げに入る。

2月11日 晴れ 近代の木組排水施設の実測、写真撮影終了。直ちに採り上げる。版築面上の遺構掘り上げ終了。

2月12日 雪

2月16日 晴れ 第Ⅰ面平面実測

2月17日 雪

2月21日 晴れ 3軸沿いの深掘り部分土層断面実測。溝には北壁際にも深掘りトレンチを入れる。

2月25日 晴れ 第Ⅰ面全景写真撮影

2月27日 晴れ 下層遺構検出の粗掘りに入る。東側では土丹版築層を剥がすと約20cm程で黒褐色粘質の中世基盤層が現われ、これを第Ⅱ面とする。

2月29日 晴れ 粗掘り終了。東側から遺構検出に入る。C軸の東約1.5mから若宮大路寄りに基盤層なく、溝であることが判る(南北溝Ⅱ)。

3月2日 晴れ 遺構掘り上げ始める。

3月3日 晴れ 南北溝Ⅱ上層の横木など写真撮影。終了後平面実測。北壁際深掘り部分の土層断面実測。

3月5日 晴れ一時曇り 南北溝Ⅱ3軸土層断面写真撮影。終了後平面実測。

3月7日 晴れ 遺構掘り上げ終了。平面実測に入る。

3月8日 晴れ 平面実測終了。

3月9日 晴れ 全景・遺構別写真撮影。終了後南北溝Ⅱ横木など取り上げ、完掘。

3月10日 晴れ 南北溝Ⅱ完掘状態の写真撮影。北壁際深掘り部断面写真撮影。

3月11日 晴れ 器材撤収。現地調査終了。

第3章 調査結果

第1節 検出遺構

1. 近代遺構

a. 木組排水施設

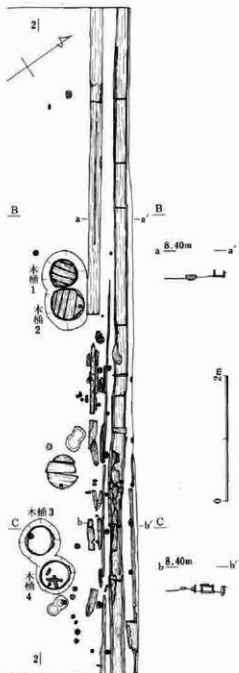
地表下に厚く近・現代の客土が入っており、これを除くと深さ約60cm内外で東西方向に走る木組の排水施設と思われる遺構を検出した。調査区北壁沿いであって、若宮大路にはほぼ直交している。底面は海拔8m前後で僅かに第Ⅰ面に食い込んでいる。

土止めのためと思われる外枠を設け、内側に木組排水施設本体を置く二重構造になっている。幅は外枠が50～60cm、内枠が20～25cmである。

外枠は厚さ1.5～3cm、幅12～15cm、長さ1.8m程の板を横に継ぎ、内側に丸太杭を板一枚につき二本立てて支えとしている。外側は掘方の壁の土におし当てられていたと考えられる。

排水を通す本体である内枠は以下のような構造を持つ。幅20～25cmの板を横に並べて溝底とし、その縁辺部に外枠とはほぼ同寸法の板を横に立てて側壁としている。側壁上縁には70～90cmおきに幅4～10cmの小さな横板が南北に打ちつけられ、側壁の倒壊を防いでいる。底板の長さはまちまち(72～188cm)であるが、各々の継目の下に幅10cm前後の板が置かれている。これは底板のずれとそれに伴う水漏れの防止措置であろう。なお東寄りの一部に腐蝕した木板が、側壁上縁に打ちつけられた横板の上に残っており、蓋の名残りであろうと思われる。

この木組排水施設の中からは明治以降の彩絵磁



第3図 近代の木組排水施設と木桶

器類が出土している。また、該遺構南側に、断面概ね半月形で、丸太を縦に裁断した長さ3.4mの木とその続きの残片と思われる木片が、平行して置かれている。該遺構以前の排水施設の底板の残存である可能性があるが、直上から近代の陶磁器が出土しており、これも明治以前に遡る遺構ではない。

b. 木 桶

底部4個、蓋1点がある。木組排水施設の南隣りにあるが、関係は不明である。底部には西から1～4まで番号を付した。1と2、3と4の2個でひと組になって、平面形「8」の字状の浅い平坦な底面を持つ土壌中に据え置かれている。

木桶1—直径42cm。底板は厚さ1.2cm前後の板を5枚横につないだもの。側板の厚さ1.2cm程。

木桶2—直径53cm。底板は厚さ1.2cm前後の板をこれを5枚つないだもの。側板の厚さ1.2cm程。底板に径4cmの小孔があげられている。近代の陶磁器が出土。

木桶3—直径4.5cm。側板の厚さ0.9～1.2cm。底板なし。近代磁器出土。

木桶4—直径4.5cm。側板の厚さ1cm前後。底板なし。

蓋—底板の可能性もある。直径4.8cm。厚さ1cm前後。

2. 第Ⅰ面

地表下70cm程、海拔8m前後の所で検出した、拳大の破碎土丹を敷きつめた堅半な面である。上面には10～40cmの厚みで、若干の焼土と土丹小粒子を含む灰褐色砂質土が堆積していたが、近代の削平で調査区東辺に向けてこの土は薄くなり、C軸より東側では消滅している。従ってこの部分では土丹版築の直上まで近・現代の客土が覆っている。またC軸から西に3m程のところで土丹版築は消え、以西は溝覆土となる。深掘り3の南側、調査区南端付近でも土丹版築は落ち込むが、こういったことから、本調査区が第Ⅰ面の時期にあつては屋敷地の中心からはずれた西南角の一部を占めているに過ぎないことが判るのである。

面上の包含層である灰褐色砂質土中の遺物はかわらけの残欠が少量あるのみで、年代を特定する材料に乏しかった。

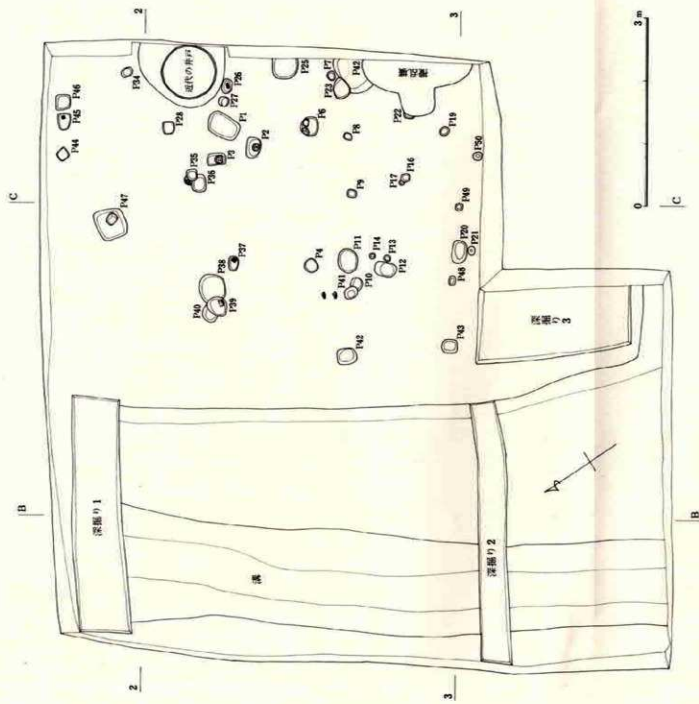
この面で検出した遺構は柱穴50個、溝1条である。

a. 柱 穴

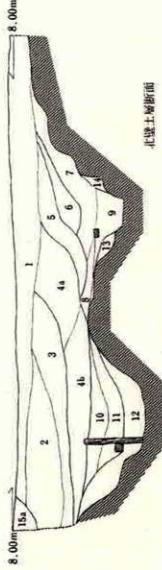
50個のうち、覆土と出土遺物からみて近・現代と思われるものを除くと、残るのは次の番号である。1・4・10～12・20・23～25・28・35～38・41～43・48～50（第4図）—以上の20個であるが、これらの柱穴から掘立柱などの建物を想定することは、位置的にみて難かしく、また出土遺物も殆んど無いところから、年代の特定もできなかった。

b. 溝（土層断面図溝4）

先述の如く、第Ⅰ面の土丹版築はC軸の西およそ3m前後で消滅し、以西は砂礫混りの粗い灰褐色砂質土となり、これを掘り下げると溝であることが判明した。下層の前代の溝覆土中で完結して地山が底・壁面を成していないため、いささか不明瞭な形状ではあるが、若宮大路に平行して南北

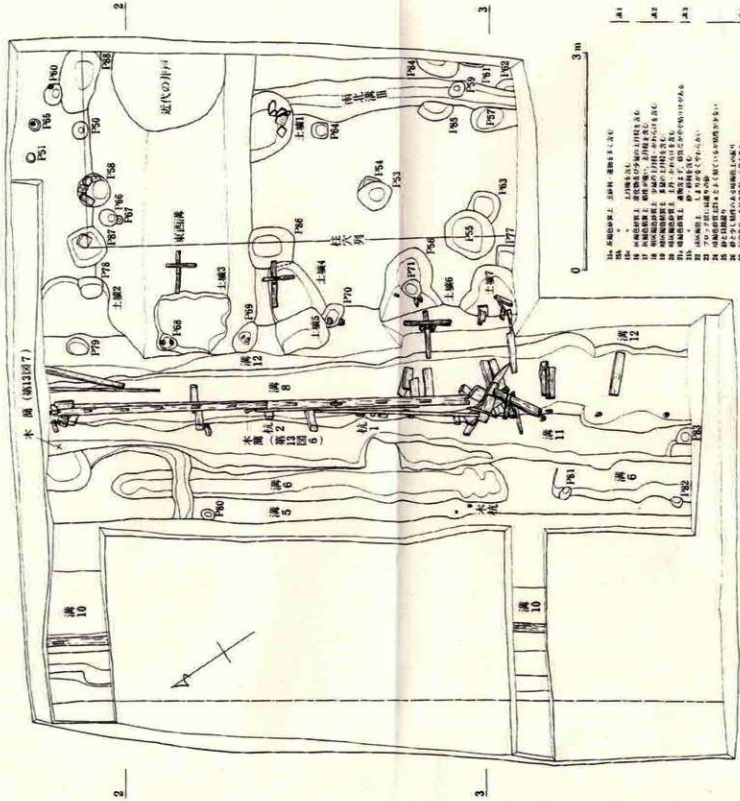


第4図 第1 面遺構全区

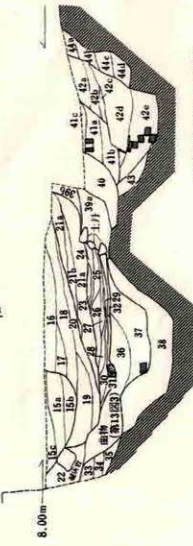


北壁土層断面

157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212



157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212



3 排水溝部分の上層断面

- 157. 土溝1 (第13区7)
- 158. 土溝2 (第13区6)
- 159. 土溝3 (第13区5)
- 160. 土溝4 (第13区4)
- 161. 土溝5 (第13区3)
- 162. 土溝6 (第13区2)
- 163. 土溝7 (第13区1)
- 164. 土溝8 (第13区0)
- 165. 土溝9 (第13区-1)
- 166. 土溝10 (第13区-2)
- 167. 土溝11 (第13区-3)
- 168. 土溝12 (第13区-4)
- 169. 土溝13 (第13区-5)
- 170. 土溝14 (第13区-6)
- 171. 土溝15 (第13区-7)
- 172. 土溝16 (第13区-8)
- 173. 土溝17 (第13区-9)
- 174. 土溝18 (第13区-10)
- 175. 土溝19 (第13区-11)
- 176. 土溝20 (第13区-12)
- 177. 土溝21 (第13区-13)
- 178. 土溝22 (第13区-14)
- 179. 土溝23 (第13区-15)
- 180. 土溝24 (第13区-16)
- 181. 土溝25 (第13区-17)
- 182. 土溝26 (第13区-18)
- 183. 土溝27 (第13区-19)
- 184. 土溝28 (第13区-20)
- 185. 土溝29 (第13区-21)
- 186. 土溝30 (第13区-22)
- 187. 土溝31 (第13区-23)
- 188. 土溝32 (第13区-24)
- 189. 土溝33 (第13区-25)
- 190. 土溝34 (第13区-26)
- 191. 土溝35 (第13区-27)
- 192. 土溝36 (第13区-28)
- 193. 土溝37 (第13区-29)
- 194. 土溝38 (第13区-30)
- 195. 土溝39 (第13区-31)
- 196. 土溝40 (第13区-32)
- 197. 土溝41 (第13区-33)
- 198. 土溝42 (第13区-34)
- 199. 土溝43 (第13区-35)
- 200. 土溝44 (第13区-36)
- 201. 土溝45 (第13区-37)
- 202. 土溝46 (第13区-38)
- 203. 土溝47 (第13区-39)
- 204. 土溝48 (第13区-40)
- 205. 土溝49 (第13区-41)
- 206. 土溝50 (第13区-42)

に走っており、位置と規模からみて、大路東側の側溝であるのは間違いないと思われる。溝西側の切り込み口は後代の溝に削平されるなどして不明であるが、壁面下半部の立上り角度から推定すると、現状若宮大路歩道東端までの距離約8m、溝幅は調査区北端で約4m前後、3軸付近で約3.7m、調査区南端ではやや広がって約4.3m程である。後に土層断面で確認したところでは、下層の初期溝から数えて、該溝は少なくとも9期目の改修ないしは浚渫に相当する。土層断面図の溝4である。なおこれ以後にも改修ないし浚渫が少なくとも3度加えられている。

断面形状で見ると、底面は浅い皿状に僅かに窪み、壁は下半部でなだらかに、上半部で大きく抉れて比較的急傾斜で立ち上るため、全体として底面の幾分落ち込んだ丸味のある箱型を呈する。東側壁面下半部のところどころに人頭大の土丹の雑な集積が見られるが、これは護岸のためのものであったろうと思われる。上半部は後代の溝により攪乱されている。また、西側壁面には3軸付近の土層断面に一辺23cm、断面隅丸方形の凝灰岩切石が懸ったが(第5図)、位置から言って、或いはこれも溝西岸の護岸の名残りである可能性がある。

深さは東側の土丹版築面(第Ⅰ面)から調査区北端で約1.03m、3軸付近で約92cmである。海拔では北端6.96m、3軸付近7.05mと北側が低くなっているが、これはおそらく計測点の間隔の短かいこと(約6m)と、底面が地山上になくやや曖昧なこととに起因しているのであって、地山に切り込まれて底面の明瞭な下層の前代の溝の、北から南に水の流れている例からみて、該溝も全体的には同方向に、即ち鶴岡八幡宮から海岸に向かって流れていたのは確実である。

出土遺物には、かわかけの他に溝底に堆積した暗褐～黒褐色の水気の多い柔弱な土からの木製品や、中層灰褐色砂質土中からの五輪塔火・水輪などがある。また、上層から近世陶磁器が出土しているが、これは後代の溝(溝1)のものであると思われる。

3. 第Ⅱ面

第Ⅰ面を成す土丹版築層は15～25cm程の厚みがあり、これを除くと、あるか無きかの間層を挟んで第Ⅱ面が現われた。黒褐色結質の中世基盤層上をそのまま生活面として使用している。間層が殆どないのは、第Ⅰ面構築の際にはほぼ全面に及ぶ削平を受けたためであろう。標高は約7.8m前後である。

この第Ⅱ面はC軸の西約1.5mで大きく落ち、以東は南北に走る溝の覆土となる。また調査区北東部分にも東西の溝があって、この部分でも面が途切れている。

第Ⅱ面で検出した遺構は柱穴38個、土壇7個、南北溝3条(大別して、溝は何度も掘り直されているため、実際には10条を超えるが掘削と遺物採集にあたっての便且上、3条に纏めた。)、東西溝1条である。

なお、測量杭への配慮と、排土置場の確保などから、第Ⅱ面の調査面積は第Ⅰ面に比べて若干狭くなっている。

a. 柱穴

第Ⅱ面の柱穴は中世基盤層に掘り込まれているため、壁・底面共に明瞭なものが多いが、第Ⅰ面同様、殆どがここでも配置に秩序なく、調査範囲の制限もあって建築址などは僅かに数穴にその可能性を指摘できる以外に、想定し難い。そこで本稿では特徴的なもののみ詳述することとし、その余は平面図（第5図）を参照されたい。

柱 穴55・86・87・88（第6図）

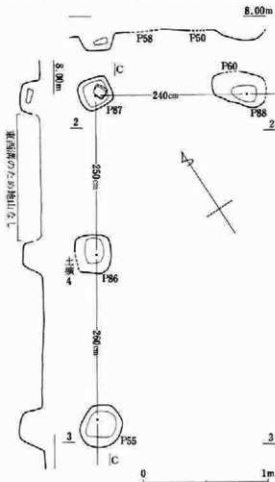
55・86・87はほぼ同規模で、溝に平行して南北に並んでおり、掘立柱建物の一部である可能性が考えられるのでここに抽出しておいた。また88は規模はやや異なるが、位置からみて無視できないため、とりあえず図に含めた。55・86・87の方位は $N-33^{\circ}-E$ である。55—径68cmの不整形円形。底面の高さ7.44m。86—溝に平行した長軸を持つ。長辺63cmの隅丸方形で、底面の高さ7.51m。87—対角線を東西又は南北方向に持つ長辺53cmの隅丸方形で、底面の高さ7.45m。礎石らしい一辺20cmの角隅があるが、底面から10cm余り浮き上っており、元の位置に留まっていはいないと思われる。東西溝と重複するが、この柱穴のほうか新しい。88—主軸を溝と直交方向に持つ。長さ約85cmの長楕円形。断面は楕円状を呈し、底面の深さは7.6m。この柱穴も溝より新しい。

柱 穴58

C—2交点付近にある。ほぼ正円形。直径45cm、深さ40—42cm、底面の標高7.33m。南半を東西溝に切られている。北西部に礎板が残っているが、本来の場所でないと思われる。半人頭大の石が3個底面に残っているのは根固めであると考えられる。

柱 穴68・69・70・71

いずれも南北溝2の東壁にあり、各々110—125cm程の間隔で並んでいる。深さは30—40cm、形状はまちまちであるが、共通して2本の角枕（又はその抜取穴）が残っている。この2本の角枕は土壌6の例からみて、溝と直交する一辺約6cmの角材を、その間に挟み込んでいたと考えられ、この点と位置から言って、該柱穴列が溝の施設の一部である可能性は強い。68北側の79も位置的にみて、この並びであるかも知れない。



第6図 柱穴列

柱 穴80・81・82

80は溝5の底に、81・82は溝5と6の境界付近にある。径15～20cmの楕円形で、いずれも深さ約10cmの小穴である。これはおそらく、溝11などに見られる枕の、抜取穴であろう。

b. 土 塚

7個のうち1個を除いてすべて南北溝Ⅱの東岸にかかっており、例えば、土塚4のように、溝に直交する角材を有しているところなどは、溝との関連を窺わせるに足る。

土 塚1

南北溝Ⅱと東西溝との交点付近にあり、両方の溝に重なるが、いずれよりも新しい。東西1m、南北長は確認できなかったが、概ね楕円形の平面形を呈すると思われる。断面は浅い皿状で、深さ3～4cmと非常に浅いが、これは上部が後代の面構築の際に削り取られたためであろう。南側底面に瓦片が6点残っている。

土 塚2

南北溝Ⅱ東岸の調査区北壁際にある。柱穴78と切合っているが先後関係は把握できなかった。西側の欠けた不整の半月形をしており、東西72cm、南北90cm以上、深さは東端で17cm、西端の南北溝Ⅱとの接点で20cm、と浅い。礫大土丹を含む暗褐色土が覆土である。性格は不明ながら、位置と形状から言って、後述する土塚4のように十字架状の角材が置かれていた可能性がある。

土 塚3

東西溝の底面にあつて、西端が南北溝Ⅱと重なっている。南北105cm、東西85cm以上の不整形で、周囲の東西溝底面からの深さ10～14cm程を測る。覆土は暗褐色粘質で、東西溝覆土との間に切れ目無く、おそらく溝掘削時の粗掘りの痕であろうと思われる。

土 塚4

調査区中央部にあつて、土塚5及び柱穴86と切り合っている。土塚5とは覆土が共通しており同時に存在していた可能性があるが、柱穴86よりは新しい。東西に細長い半月形を呈し、東西長84cm、南北75cm、底面は平坦で深さ40cm前後である。この土塚には、長軸を南北溝と直交方向に持つ、二本の角材を十字架状に組み合わせたものが置かれている。角材は、東西方向のものが長さ67cm、幅12cm、厚さ7～9cm、南北方向のものが長さ4.2cm、幅8cm、厚さ4～5cmで、東西の角材に東端から20cmのところまで深さ5cm、幅12cmの断面楕円形の窪みを入れ、この部分に南北のそれを嵌め込んでいる。溝の関連施設であると思われるが詳細は不明である。

土 塚5

南北溝Ⅱ東壁の中途にあり、土塚4とも切り合っているが、覆土に差異を見出せないで、一連の遺構であることが考えられる。南北71cm、東西は現状で50cmを測り、西側を欠く不整の半月形に近い形状を呈する。平坦面からの深さは約1m内外と深い。詳細は不明であるが、これも溝の護岸施設に伴うものではなかろうか。

土 塚6

土壇5の南約1.5mにあって、やはり溝にかかっている。柱穴71・56と切り合うが56とは覆土に差が認められず、71よりは古い。柱穴56を含めて見てみると土壇4・5と似通っていると言える。これも半月形を呈しており、南北89cm、東西は現況で40cm、深さ35cmを測る。

土壇7

土壇6の南約1.2mにあり、これも溝東岸にある。東西71cm（現況）、南北78cm以上、深さ28cmで、不整の半円形を呈する。

c. 溝

南北溝Ⅰ・Ⅱ

何度も掘り返されている溝のうち、第Ⅱ面に伴うと考えられるものは、溝5以下の8条であるが、便宜上2条に大別して説明を加えることにする。即ち大路寄りの一群がⅠ、平坦面寄りの一群がⅡである。（第5図の土層断面参照）

Ⅰ—幅は上端で2.4m（北壁際）～2.8m（3軸付近）、底面で90cm（北壁際）～1m（3軸付近）を測り断面形は上部の開いた逆台形状を呈する。深さは第Ⅱ面から約1.6m前後、底面の標高は北壁際6.23m、3軸付近6.19mとなっている。西岸から現在の若宮大路歩道東端までの距離は約5.5mである。溝中西寄りには、ホゾ穴を有する角材（幅12～14cm、厚さ9～10cm）が南北方向に置かれているが、後述する南北溝Ⅱの角材群と異なり、ここでは一段である。また、層位的にみて、この角材が伴うのは最初の掘り直し（溝9）である。長さは、排土置場の確保のため全掘しておらず、不明である。

Ⅱ—幅は上端で2.2m（北壁際）～2.6m（3軸付近）、底面で40cm（北壁際）～60cm（3軸付近）と、Ⅰよりもやや狭いが、断面形はやはり逆台形状である。深さは第Ⅱ面から1.3～1.4m、底面の標高は北壁際6.47cm、3軸付近6.44mで、Ⅰよりも20cm以上浅い。西岸から現在の若宮大路歩道東端までの距離は8m前後である。溝中には幅10～15cm（3～5寸か）、厚さ9～10cm（3寸か）の角材が、概ね二段、場所によっては三段に置かれている。これらの角材は縦に打ち込まれた杭によって両脇を挟まれており、横方向のずれが防がれている。角材には30～40cm間隔で長さ12～15cm（4～5寸か）のホゾ穴が穿たれているので、例えば柵列・護岸施設等、何らかの上部構造を支える根太状のものであると考えられる。ホゾ穴は上・下（または上・中・下）で位置がずれて東が貫通せず、また土層断面からみても同時期に存在していたとは考えにくい点からみて、上段は後代の改修であると思われる。構築方法に上・下段で殆んど変化がない点は、年代の接近を示唆するものであろう。3軸付近に東材らしき木材を8本重ねて上段の角材の下に置き、沈下を防いでいる様子が見られるが、おそらく改修の際に、邪魔な前代の東材や杭を纏めて抜き取ったものと思われる。

以上の二条の溝の新旧は、接点の部分が上層から掘り込まれた後代の溝によって削り取られているため、土層断面からは判断できなかったが、後述するかわらけ等の出土遺物の諸相からみるとⅠの方がⅡよりも幾分先行するものである。即ちⅠは13世紀中葉、Ⅱは13世紀中葉～後半に属している。

南北溝Ⅱ

調査区東南域にあり、南側は調査区外に延びている。土壌Ⅰやいくつかの柱穴と切り合うが、いずれよりも古い。また東西溝の北側には延びておらず覆土も共通しているところから（中世基盤層黒褐色粘質土小塊を多く含む暗褐色粘質土）、本址と東西溝はほぼ同時期に存在していたと思われる。幅40cm前後、断面はU字形を呈し、深さは第Ⅱ面から約20cm、底面の標高は7.6m（南壁際）～7.57m（東西溝に接する付近）と、東西溝に流れ込んでいることが判る。おそらく、東側調査区外にあって確認し得なかった近在の建物の、例えば、雨落ち溝のような簡便な排水施設であったと思われる。

東西溝

若宮大路と直交方向に走行しており、南北溝Ⅱ・柱穴列などに切られている。切り合い関係と覆土からみて、本調査地点の全遺構中最も古いものである。幅約2.4m、断面は整った逆台形状を呈する。深さは第Ⅱ面から1m前後程もあり、底面の標高は7.02m（東壁際）～6.94m（南北溝Ⅱとの接点付近）である。覆土は概ね中世基盤層の黒褐色粘質土塊を多く含む黒褐色土で、先述の如く、南北溝Ⅲと共通しているが、底面近くでは暗青灰色を呈する。出土のかわらけからみて、該址は13世紀前半までさかのぼらせることができる。また、西端が南北溝のどれかに流れ込んでいることは確実であるが、後代の溝に接点部分を切り取られているため、明らかにはできなかった。

第2節 出土遺物

陶磁器・かわらけ・木製品・石製品などがあるが、その多くが溝中からの出土であって包含層からのものが少ないのは、後代の削平によって中世の包含層が殆んど残っていないためであると思われる。

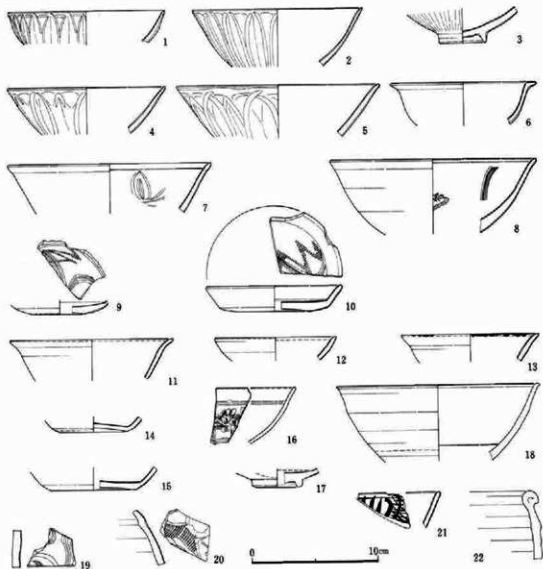
1. 舶載陶磁器（第7図）

22点が出土した。内訳は青磁10点、白磁8点、青白磁2点、赤絵、褐釉陶各1点である。

a. 青磁（1～10）

鑄井文碗（1～5）

1—釉薬は青緑色で厚くかけられ、無数の気泡のため殆んど失透している。胎土は灰色で緻密である。口径12.3cm。南北溝Ⅱ中層から出土。2—釉薬は灰青色を呈するが、夾雑物のため半ば以上の部分で白濁している。胎土は灰色で岩石質に焼けている。口径13.4cm。南北溝Ⅱ中層から出土。3—釉薬・胎土共Ⅰと共通している。高台皿付部分は酸化現象で赤褐色を呈する。底径3.7cm。北壁際深掘り部分中層から出土。4—釉薬は青灰色透明、胎土は灰色で緻密に焼けている。蓮弁の稜線は鋭く、明瞭に見える。口径12.4cm。B—3深掘り部分の南北溝ⅠとⅡの境界付近から出土。5—幅広の蓮弁を持つ。釉薬は灰緑色で失透している。胎土は灰色でややきめが粗い。口径16cm。A・B—3深掘り部分中層から出土。



第7図 柏藪陶器

以上の青磁はいずれも龍泉窯系であろう。

無文鉢（6）

器壁は薄く、口縁部が外に折れる。軸葉は青灰色半透明、胎土は灰白色できめ細かく、精緻である。割れ口に黒漆が付着している。口径11.6cm。南北溝Ⅱ中層から出土。これも龍泉窯系であろう。

劃花文碗（7・8）

7—軸葉は淡青灰色半透明、胎土は灰色で堅緻に焼き上っている。蓮華の花弁の一部が見られる。口径15.9cm。C—2東西溝覆土上層から出土。8—軸葉は暗灰緑色で薄くかけられ、胎土は灰黒色を呈する。外面にロクロ目を留める。口径16.2cm。近代の木組排水施設中から出土。

これら二点も龍泉窯系であると思われる。

帯捲文皿 (9・10)

9—釉薬は淡緑色透明で貫入多く、胎土は灰色で若干気孔が見られる。底径4cm。南北溝Ⅱ上層から出土。10—釉薬は灰緑色でこれも貫入多く、胎土は灰色でややきめが粗い。口径10.6cm、底径5.6cm、器高2.1cm。南北溝ⅠとⅡの境界付近の中層から出土。

この二点の皿は同安窯の系譜に属すると思われる。

b. 白磁

口元げ無文皿 (11~15)

口縁部の釉薬を拭って露胎させた一群で、概ね半透明の釉薬がかけられ、胎土は灰~灰白色で堅緻である。釉表にはしばしば針穴大の小孔が認められる。11—体部上半から口縁部にかけて緩かに外反する。口径12.9cm南北溝Ⅱ中層から出土。12—体部中位の外器表に浅い稜が見られる。口径11.6cm。南北溝中Ⅱ中層から出土。13—比較的厚目の器壁を持ち、上半部が若干外反する。口縁の露胎部分に油煤らしき黒色の付着物が認められる。口径10.8cm。14—外底面は露胎で、重ね焼き痕と覚しい環状の釉薬の付着が見られる。底径5.2cm。15—外底面にも薄く釉薬がかけられている。底径5.8cm。これも南北溝Ⅱ中層から出土。

口元げ牡丹文碗 (16)

口元げではあるが、内面には牡丹花が押印され、胎土は乳白色に近く、また釉薬も殆んど失透していない点で、前記五点とは異なっている。南北溝Ⅱ中層から出土。

碗 (17・18)

共に白濁した縮みの多い釉薬がかけられ、胎土はやや黄味を帯びた灰色である。17—高台器から高台内にかけて露胎で、カンナ痕を顕著に留めている。内底面は蛇の目状に釉薬を拭き取っている。高台径4cm。東西溝中層から出土。18—いわゆる端反り碗。釉表に小孔が目立つ。口径16.1cm。東西溝中層から出土。

c. 青白磁 (19・20)

共に梅瓶の一部であると思われる。19—火熱に遭って釉表に気泡が吹き出し、黒ずんでいる。牡丹文であろう。釉薬は水青色ではぼ透明、胎土は灰色を呈してきめが細かく粘性が強い。北壁階深掘り部の南北溝ⅠとⅡの境界付近から出土。20—肩部近くの破片で、これも牡丹文であると思われる。釉薬は水青色透明で気泡多く、胎土は灰色でややきめが粗い。B—2第Ⅰ面上から出土。

d. 赤絵 (21)

赤色顔料を釉表に上絵付けした彩絵磁器片が一点出土した。口径の大きな、碗の口縁部である。釉薬は1mm近くの厚味を持ち、若干白濁している。胎土は灰色で気孔が多くややきめが粗い。明代後半期のものであると思われる。B—2第Ⅰ面上から出土。

e. 緑釉 (22)

洗の口縁部が一点出土した。釉薬は緑色を呈するが若干銀化現象が始まっており、内面は黒色に近い。胎土は淡褐色で砂粒を多く含む。B—3南北溝Ⅱ中層から出土。

2. 国産陶磁器・土器質雑器（第8図）

大半が小片で、全体に数量が少なく、年代もまちまちである。なお記述の都合上、土器質の手焙りもここに含める。

a. 瀬戸（1・2・3）

1—口径16.8cm、高台径7.1cm、器高3cmの皿である。釉薬はやや黄味がかかった透明の灰釉で、高台脇から高台内まで露胎している。胎土は黄白色を呈し、気孔が多い。近世初頭の所産であると思われる。B—1溝上層から出土。2—卸し皿の底部片である。底径7.3cm。卸し目は内底面に設けた円圏内に納められている。外底面は露胎で、ロクロ糸切痕が残る。釉薬は黄白色でやや不安定、胎土は黄白色を呈しきめ細かい。南北溝Ⅱ中層から出土。3—入子であるが、二次焼成を受けて胎土が白く変色している。底径4cm。底部に糸切痕を残す。南北溝Ⅱ中層から出土。

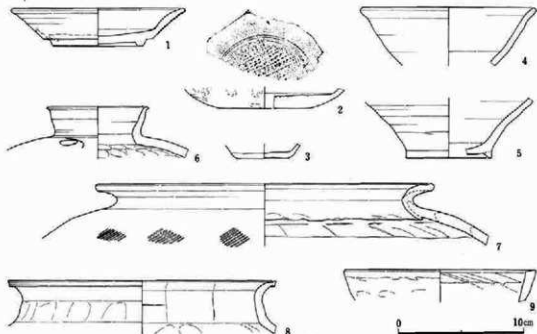
b. 捏鉢（4・5）

4—口径27.2cm。内壁上部に降灰や砂粒の付着が著しい。胎土は灰色で、夾雑物が多いが良く焼き締まっている。C—2第Ⅱ面から出土。5—高台径13.6cm。体部中位から上半部がやや外反する。胎土は灰色で粗々しい。東西溝上層から出土。

以上の2点は共に常滑系のものであると思われる。

c. 瀬美（6・7）

6—壺の肩—口縁部片。口径16cm。肩部に線描の文様の一部が見える。胎土は灰色で砂っぽい。



第8図 国産陶磁器・手焙り(9) ※4・5・7～9はスケールの長

南北溝Ⅱ中層から出土。7—裏の肩—口縁部片。口径53.6cm。胎土は灰—灰黒色を呈し岩石質に近い。やや焼成ムラが認められる。C—2第Ⅱ面から出土。

d. 常滑(8)

頸—口縁部片。口径12.4cm。若干焼成不良のため、胎土は淡褐色を呈する。外面口縁直下に、炭化物か油煤らしき黒色の付着物が見られる。C—2第Ⅱ面から出土。

e. 土器質手埴り(9)

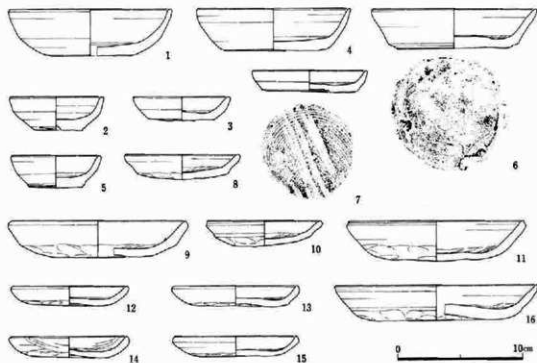
口径30.1cm。内・外面の口縁直下に灰—灰白色の漆喰が付着している。胎土は褐—黒褐色を呈し、きめが粗い。南北溝Ⅱ中層から出土。

3. かわらけ(第9・10図)

大半が溝中から出土した。ここでは以下、遺構と層位による大別に沿って記述するが、溝そのものがいくたびも改修、又は浚渫されているために遺物の混入を免がれることはできない。従って以下の記述は、出土した形態の主たる傾向について説明したものである。

a. 南北溝Ⅰ中・上層出土のかわらけ(1—5)

この層から出土するものはすべてロクロ成形のものである。大型のもの(1・4)は薄手で内埴



第9図 かわらけ(1) 1—9—南北溝Ⅰ(1—5—中・上層, 6—9—下層)
10—15—東西溝, 16—第Ⅱ面柱穴33

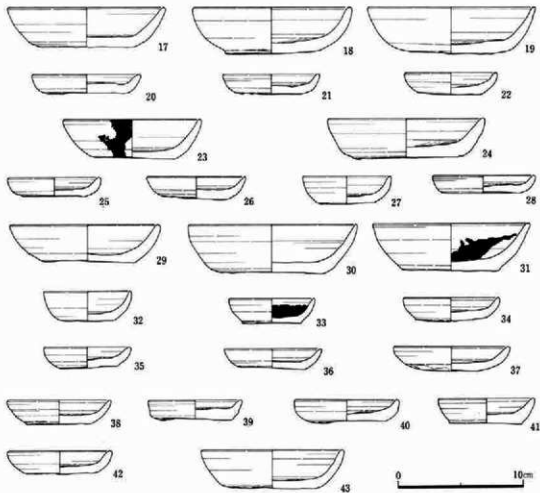
傾向が強く、全体に深めの印象を受ける。小型のものは、器高が高く(2.6~2.7cm)器壁が体部中位で内傾するもの(2・5)と、浅く内傾しながら立上る器壁を持つ低い器高のもの(3)とがある。

b. 南北溝Ⅰ下層出土のかわらけ(6~9)

ロクロ成形のものと手捏ね成形のものが共存する層である。ロクロ成形のものは、大型(6)が、直線的ないしやや開き気味の器壁を持つ底径の大きなもので、小型(7)が低い器高の、内彎する器壁を持つものになる。手捏ね成形のものは、大型(9)が口縁端部のさほど尖らない、器壁の曲線のなだらかなもので、小型(8)が体部の稜の強いものになっている。

c. 南北溝Ⅱ上層出土のかわらけ(17~22)

すべてロクロ成形の一群である。大型のものは器壁のさほど内彎しないもの(17)と、強く器壁が内彎し、底径が小さく深いもの(18・19)とがある。小型のものは全体に器高が低く、底径が大



第10図 かわらけ(2)一南北溝Ⅱ出土 (17~22—上層, 23~28—中層, 29~37—下層, 38~43—最下層)

大きくて直線的な器壁を持つもの(20・21)と、底径が小さく器壁が内彎するもの(22)とがある。

d. 南北溝Ⅱ中層出土のかわらけ(23~28)

この一群もすべてロクロ成形であるが、大きさで大・中・小の三種類に分けることができる。大型のものは全体的に内彎傾向が強いが、口径・底径比が小さく浅めのもの(24・29)と、口径・底径比が大きく深いもの(30・31)とがある。中型のものは一点で(23)、口径10.7cm、薄手で器壁が内彎する。小型は、器高が高くて器壁が強く内彎するもの(27)と、浅くて器壁のやや貧弱なもの(25・26・28)などが含まれている。

e. 南北溝Ⅱ下層出土のかわらけ(29~37)

小型の手捏ねのかわらけを一点含む以外はロクロ成形のものばかりである。大型のものは18・19に似た底径の小さなものが主流であるが内彎の度合いがやや弱くなるとみてよく(30・31)、器高の低いもの(29)も含まれている。小型では薄手で深いもの(32・33)と、浅い角度で立上る器壁のもの(34・35・36)とに分けられる。手捏ねのもの(37)は稜を持たず、口縁端部が丸い。これは混入である可能性もある。

f. 南北溝Ⅱ最下層出土のかわらけ(38~43)

すべてロクロ成形のものである。大型のもの(43)は23に似た器形で全体に小さく、小型のものは非常に浅い貧弱な器壁の一群(39・40)と、浅い角度でなだらかに立上る器壁の一群(38・41・42)とがある。

g. 東西溝出土のかわらけ(10~15)

すべて手捏ね成形で、大型のもの(11)は口縁端部に凹帯が廻り、全体に造りが薄く、小型のものは胴下半部の稜が強く口縁端に凹帯が廻るもの(10)と、全体に丸味があって器壁が内彎するもの(12・15)とに分れる。

h. 第Ⅱ面柱穴53出土のかわらけ(16)

大形手捏ね成形のもの一点があるが、口径16cmと大きく、器壁は浅く開き気味に立上って口縁端部が尖っている。

4. 石製品(第11・12図)

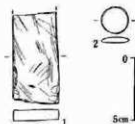
a. 砥石(1)

灰色に近い色調の硬質の泥岩で幅3.5cm前後、両端を欠失している。よく使い込まれており厚さ8mm程に薄くなっている。仕上げ砥である。B-3第Ⅰ面上から出土。

b. 礬石(2)

漆黒の粘板岩を磨き上げて作っている。直径2.4cm、厚さ4mm。C-2第Ⅰ面から出土。

c. 五輪塔(第12図)



第11図 砥石(1)、礬石(2)

火輪と水輪が、南北溝上部の砂層から出土した。凝灰岩製で火輪は一辺18cm、高さ11.5cm、水輪は直径20cm、高さ14.6cm。いずれもひどく損耗している。

5. 木製品 (第13・14図)

殆んどが南北溝Ⅰ・Ⅱからの出土であった。テン箱一箱程の量であるが、図化に耐え得るのは八点到過ぎず、他は小さな木片類である。

a. 板草履芯 (1)

長さ24.8cm、幅9.3cm、厚さ2～3mmで、南北溝Ⅰ上層から出土した。わらなどの遺存は認められない。

b. 木札状木製品 (2)

長さ19cm、幅2.8cm、厚さ2～3mmの板の先端を両端から削って杖状に尖らせている点や、頂部から1cm程の箇所を両端からV字形に抉っている点は、地面に立てた木札状のもので先に紐のようなものがくりつけられていたと考えられるが、詳細については不明である。南北溝Ⅰ下層から出土。

c. 曲物 (3)

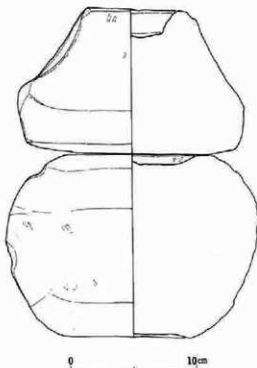
直径18.9cm、高さ9cm、深さ8cm、厚さ2～4mmの長い一枚板を二重に巻き、両端を広葉樹(おそらくは桜であろう)の樹皮で縫い合わせている。縫い目と縫い目の間の上部中央に1.7×2.2cmの方形の孔が開けられているが、これは把手状の棒を差し込むためであると思われる。南北溝Ⅰ中層から出土(土層断面図参照)。

d. 漆塗碗 (4・5)

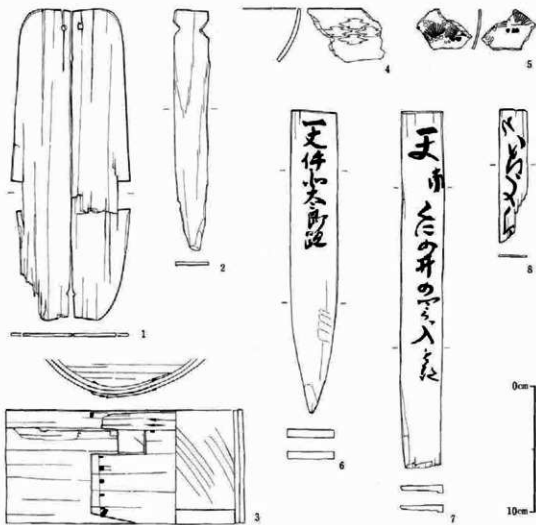
4—黒漆上に明褐色の朱漆で文様が手描きされている。文様は四ツ菱を意匠化したものと思われる。南北溝Ⅰ上層から出土。5—表裏共褐色の漆が下地に塗られ、黒漆と朱漆で松葉が描かれている。これも南北溝Ⅰ上層から出土。

e. 木筒 (6・7・8)

6—「一丈伊北太郎跡」と読める。長さ24.2cm、幅3.8cm、厚さ6～7mmの板の先端を両端から削って尖らせ、杖状にしている。「一丈」は長さ、「伊北太郎」は人名、「跡」はその遺領を受けついだ子孫たちという意味であろう。調査区北壁際の根太状の角材と角材の継ぎ目付近から、南北溝Ⅱ西壁に貼り付いた状態で出土した。7—「一丈^市くにの井の四郎入道跡」と読める。長さは現状で



第12図 五輪塔(火・水輪)



第13図 木製品

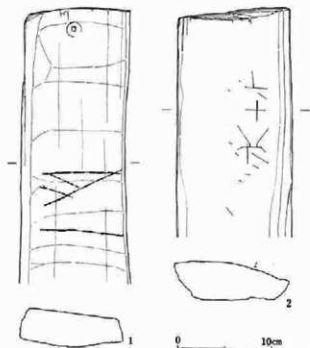
28.5cm、幅3.4cm、厚さ6mmを計るが、これは先端が尖っておらず、折損したものと思われる。文面は6と同様であろうが、「南」はいささか意味不明である。6から約3m（およそ一丈）南の、これも根太状角材の縦ぎ目裏下の底面直上から出土した。

以上二点の木簡の出土位置と二点間の距離は、それらに書かれた内容と対応しており、注意を要する。

8—損耗著しく、判読不可能。下半部を欠失しているが、長さは現状で10.6cm、幅2.3cm、厚さ1~1.5mmで、前者二点の木簡とは形状、書体とも異なり、性格が違うものと解釈している。7の近くから、いくぶん底面から浮き上がった状態で出土した。従って、溝が機能していた頃に流入した、構築時よりもやや年代の降ったものと考えられる。

1. 線刻のある木杭 (第14図)

根太状角材を固定するためと思われる、南北溝Ⅱに打ち込まれた杭のうち二本に、線刻が認められた。1は鋸のようなもので付けられたものである。杭上端近くの円形の刻みは釘隠しのような形状をしたものの圧痕であろう。2の線刻は何か先端の鋭い、例えばのみのようなもので刻まれている。これらから意味を読み取ることはできないが、溝構築の際、木材の位置を特定するための符丁の如きものではあるまいか。



第14図 南北溝Ⅱの杭(部分)

第4章 木簡について

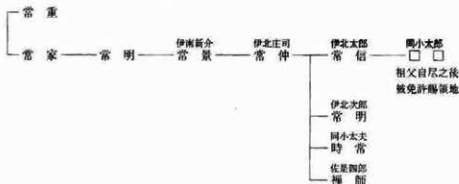
南北溝Ⅱから三点の木簡が出土した。出土地点やその状況、字句の解釈等は第3章に述べた通りであるが、このうちの立札状の形状を持つ二点、第13図6・同7は、その内容に重要なものが含まれていると思われるので、本章で若干言及してみたい。これに関しては、東京大学石井進教授の御教示に依るところが大きい。

人名と「跡」

伊北太郎

上総国伊隅荘（現在の千葉県夷隅郡域）は、平安時代末期に成立した荘園で、伊北・伊南・千町の三ヶ荘から成っている。伊北氏は、この伊隅荘を根本私領としていた御家人であり、頼朝の命を受けた梶原景時によって殺害された上総権介広常の一族に属する。

『千葉大系図』（房総叢書本）では、



『神代本千葉系図』（同上）では、



※『吾妻鏡』では伊南新介

など、伊北太郎を名乗る者が何人か見える。

文献から伊北氏の名を拾ってみると『吾妻鏡』では建長二年（1250）三月の造閑院殿造管注文に、築地役一本を伊北三郎跡が負担、正嘉二年（1258）三月には將軍二所詣後陣隨兵中に、伊北三郎跡伊北小太郎の名が出ている。また、覺園寺文書等（『千葉県史料 中世編・県外文書』所収）によ

れば、伊南荘内の土地譲状・売券・質券の中に、伊北平次（正応二年：1289）伊北荘司小太郎（永仁六年：1298）、伊北二郎太郎やすつね（嘉暦四年：1329）、伊北ひこ三郎（元徳二年：1330）、伊北三郎常信（建武二年：1335）、伊北又三郎（貞和三年：1347）などの存在を知ることができる。そこでこの「伊北太郎」には、「千葉大系図」の太郎常信か、「神代本千葉系図」の太郎胤明の可能性が高くなるが、『吾妻鏡』によると源頼朝に敵対して伊北庄司常仲が滅ばされた後、『千葉大系図』では孫の小太郎が始めてゆるぎされて所領を与えられたと記しているから、その父に当たる常信はまだ幕府から所領を与えられていないはずである。

一方、『神代本千葉系図』の胤明とその子時胤は、承久の乱後、出雲国猪布庄・飯野庄両庄の地頭に任命され、さらに福田庄の地頭にも任じられたと主張して庄園領主賀茂社と相論をくり返したが、貞永元年（1232）8月19日関東下知状（『鎌倉遺文』4362号）によって敗訴している。しかし熱功の賞として二ヶ所以上の地頭に任命された胤明の方が、この「伊北太郎」にみさわしいことは明らかであろう。

共伴遺物であるかわらけの年代観はいまだ確定的ではないが、おおまかな傾向としては13世紀中～後半にかけてのものと思われるので、現段階では俄かに決め難いものの、「伊北太郎跡」には胤明の子時胤をふくむ一族に可能性を求めることもできるであろう。

くのに井四郎入道

『姓氏家系大辞典』でみると、「くのにの井」と読めそうなのは、清和源氏頼信の子から出た国井氏しか見当たらない。国井氏は、『尊卑分脈』（新訂増補国史大系本三）では



とみえ、常陸國国井保を名字の地とした一族で、『鹿島神宮文書』（茨城県史料1-317号）の、安貞二年（1228）五月十九日関東下知状には、鹿島社額植郷の支配をめぐる社と争って敗訴した国

井八郎太郎政俊をはじめ、政広、政景ら祖父や父の名がみられ、また『吾妻鏡』仁治二年（1241）五月二十八日条には、国井五郎三郎政氏の名が見える。国井四郎入道に該当する人名はまだ見つからない。が、この一族とみてよいのではないだろうか。

「跡」

幕府が御家人役を分担させる際、父祖某の遺領をうけついで子孫たちを「某跡」と一括して共同に負担させる形式は、『吾妻鏡』建長二年（1250）三月の造閑院殿造管注文などに多く認められる。

意味と性格

出土地点とその状況、字句の解釈等は先に述べた通りであるが、これらの点——土中に打ち込んだ立札状の形状を持つ点、溝構築時のものとして間違いない点、もとの位置から殆んど移動しておらず、しかもその位置は墨書文面中の数値とほぼ等しい長さの溝構築材の継ぎ目である点、等の要素から、この二つの木簡を次のように考えることができるであろう。即ちこれらは、御家人役として公共事業を御家人に分担奉仕させた、その当該地点を表示したものであり、付近の溝中に同様のものが（「一丈」は財力等に応じて異っているにせよ）他にも幾つか並んでいたもののうちの二つであったと思われる。

御家人役は所領の多少に応じて賦課され、戦時の軍役のほか、京都大番役など各種番役をはじめ、関東御公事のように経済的負担を負うものなど多様であるが、本資料に関連しそうなものとしては、社寺修造役・將軍御所修造役・人夫役等が挙げられよう。いずれに該当するかが判明すれば、当地点の性格も自ずと明らかになるとと思われるが、これについて決定するには今後さらに議論の必要があると思われる。

第5章 調査のまとめ

溝について

今回の調査（以下、第1地点と称する）で確認した溝は、その続きが後に調査した雪ノ下一丁目372番-7地点（以下、第2地点と称する）においても検出されている。溝を論じるにあたっては、この二箇所の調査で検出したものを対比させるのが妥当であろうから、第15図にそれを示したが、なお続き方の不明瞭なものもあるので、その点を指摘して溝のまとめをしたい。

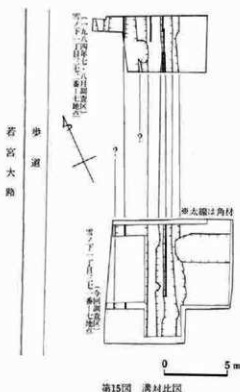
南北溝Ⅱに関しては、東岸の続き方にまず問題はないものの、西岸に差異が認められる。つまり第1地点西岸の土層断面には二時期の溝の重複が観察でき、そのため地山に段状部が形成されているのに対し、第2地点では後代の溝が前代の溝覆土中でほぼ完結しているので、地山上に段状部が残っていない。主軸方位が二箇所でも微妙に食い違っているものと思われる。

南北溝Ⅰにおいても二地点で幾らか違いが認められる。即ち第1地点の底面幅が1m程であるのに比べ、第2地点では60cm前後しかなく、また第2地点の壁面は急傾斜であるが、第1地点のそれは比較的緩やかである。

さらに、第2地点ではⅠ・Ⅱ溝間に細い溝があり、また西端にも西側に急傾斜で落ちる落込みが確認されているが、これらはいずれも第1地点では未確認のものである。

東西溝に関しては、西端でどの南北溝につながるかを確認できなかったが、層的には全遺構中最も古く、出土のかわらけからみても13世紀前半までの時期に属しており、この時期の地割の一端を知ることができる。また、後代の遺構である柱穴列は、この東西溝で示された地割を無視して構築されており、この時点で、当地点における一つの面期を考えることができるとと思われる。

以上、範囲の狭い調査であるため、疑問点も残っているが、溝のつながり等については、第1・第2地点間の空間地を調査することによって、明らかにすることができるであろう。また、平坦面と溝との関係等に関しては、二地点の調査のみではあまりに判断材料が乏しく、これも結論は先に



持ち越したい。

木簡について

御家人名の同定ができず、いまひとつつめを欠いた憾みはあるが、これらの木簡はその性質上、いっせいに立てられたものに相違なく、今後この近辺の溝の調査の機会があれば、出土例が増える可能性があり、その際に一名でも名前が判明すれば、その年代から他の御家人名をも同定することができるであろう。さらに、これらが御家人役の当該地点を表したものであるとすれば、前章で述べた如くその役名をつきとめることによって、当地点の性格を決定づけることも可能であると思われる。今後、活発な議論の湧き起ることを期待したい。

写 真 图 版



▲1. 道跡遠景（「い」欠印。左手奥が納ヶ岡八幡宮、中央の道路が若宮大路）

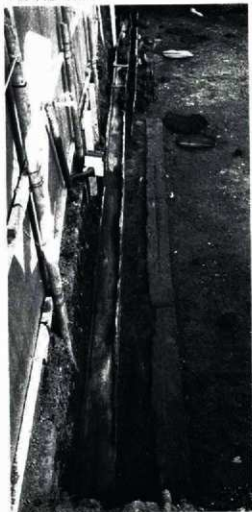
▼2. 同 近景（若宮大路段葛から）

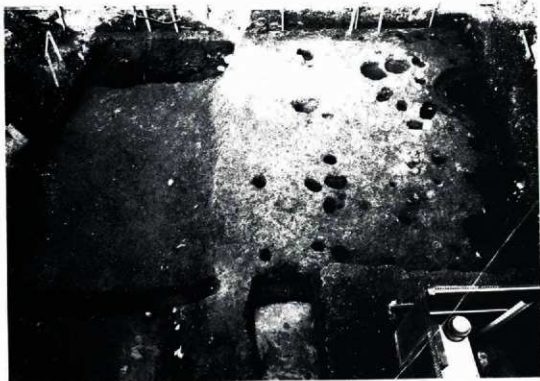




▲1. 近代の木組排水施設と木桶（東から）

▼2. 同左（西から）





▲1. 第1面全景 (南から)

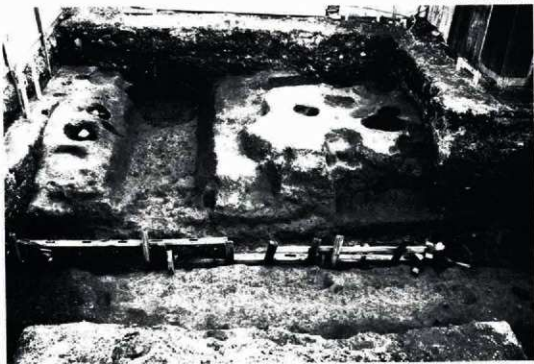
▼2. 第1面下南北溝Ⅱ上層の状態 (南から)





▲1. 第Ⅱ面全景(南から)

▼2. 同上(西から)





◀ 1. 南北溝目 (南から)

▼ 2. 同上 (北から)



◀ 3. 同上定振後の状態 (南から)



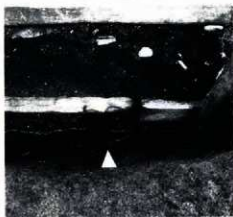


▲1. 東西溝（東から）



◀2. 南北溝目（北から）

▼3. 木簡(第13回6)出土状況



図版 7

◀ 1. 南北溝Ⅰ
・日北段土
層断面

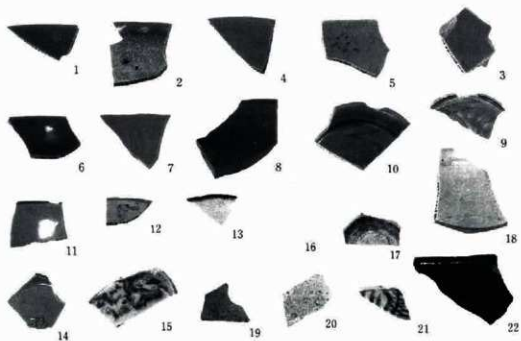


▶ 2. 南北溝Ⅱ土層
断面 (南から)



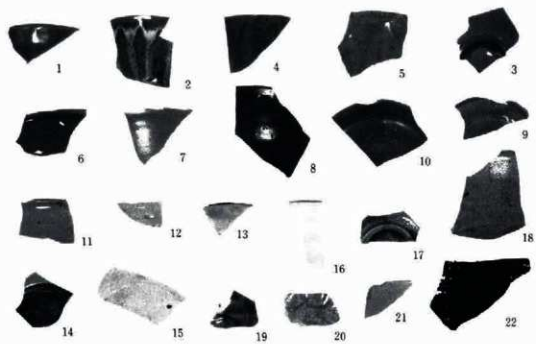
◀ 3. 南北溝Ⅰ土
層断面 (南から)





▲ 1. 和载陶器 (内面)

▼ 2. 同上 (外面)



◀ 1. 圆筒陶磁器



1



2



4



5



3



▲ 3. 手繪器

9

▼ 2. 同上 (泥质6·7, 常滑8)



6



7



8

図版10. かわらけ



图版11. 木简



6



7



8

図版12



▲1. 木製品

▼2. 石製品



瓦輪塔 (大・水輪)



▲1 南北漢目梳 2



▲2 同左梳 1



▲3. 梳 2 (部分)

▼4. 梳 1 (部分)



北条泰時・時頼邸跡

雷ノ下一丁目371番一1地点発掘調査報告書

発行日 1985年8月31日

編集 北条泰時・時頼邸跡発掘調査団

発行 鎌倉市教育委員会

印刷 新光印刷工業株式会社